





內
三

嚙鳴館遺草卷第二



上へ民の表

のまみの民の表ことたりて志士の人の的
をもつ所之故よしもの徳と明徳とも顯徳とも
稱て也亦へ度々推出されても又變て是をよ
きもゆうに明白よりひきまとそく人意の上まで
人よしもあつゆきまととはゆきすすめられ
ぬるすくはれど然もも人意とては
毛利人主ももあれど其の徳をもつてゆきも



大正十年十月廿四日
内田糸子氏贈



山本傳之



おのれの不徳を嘆くとよとへをよ希うれ
とうかへ人臣のまことひの不善とかじ悉の
善が顯してアラシ人の感彼する事うかくらぬ
たと忠臣とくふとめがよきとくのく
いふもよれぬあめうきをへの耳目すれ
もうちうとくとくとくしてたまへせようく
善行とももくへきあきくそれとゆく
妨てつゝは居るよすくとくうきく
くよくはたてくものをや或へまくよ
くもくもくもくすゑくも仕事ゆく

やくちの達とまゆふ幸うきてよをよすを
ゆもぬふうとくとくうすに下も多くく
くも是又多めらぬ達うく一叶あらえす
善行ともむくすまた悉く人材文書と
モト殊勲すりて御の善ともとくうひをも
アラシそれともじま善がえりひくも
そ是非くわきくといつりすくをとくとつ度
二度ニ事うすもももくとおへをよ
始終ひつも善めのうきくいきくわく
たらとれくも然くと遂ももくすくとく

是れが事あらば妙とすやうやうへをせよとてゐる
もつゝうへとくとくとくとくとくとくとくとくとく
いふふともか真をとむ極うりて 酒宴遊興も曲
乱舞の筋へこの戒ゆゑもゆく林 無ゆひて
人との情をゆくゆきとさうとさうとまづく諸侯考の
えまづくゆきとまづくゆきとまづくゆきとまづく
立候の状を況とねまづくゆきとまづくゆきと
まづくと道跡の耳目よやもゆくゆくゆく
ゆくゆくと誇り臣下をうへたまづく道跡キ志か
よきとをのきゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく

ちうくとせよ所ノトメの事アモいきれ
ちゆううてうるふもひよゆてがすゑ
よ難カとねされ候フリトナニのうち
ふつ角アリテキシトエラフニテ考經事
吉た人食のモアハヘキタクニトガスリヤモ
其美形將順一其惡と匡救すとありモ事と
お頬すとくものよ死命令り未トヨヌをひりふ
と其惡が匡救すトハ志モトシテ遠ゆヒテ
ちゆうぬもあれも殊々モア名ハヌモト
サムシムトモアハシトナリトのりぬハ御モ

焉よ善めあくそどりくやー。まつてつすの善
一尺ともとぞたて。邪も不善あくも念比よ練行て
ますのあく五うのうちと極へ堵ももまくぬ
五うともがきすと忠臣の節されよすだ
たうへう一人へまかぬほそくあくまきとも
ひぬ遠く所より忠臣の法よ背キヤトモ
ちき不事多御よりゆうとくわくにばーき
次第おう文主ハ大臣人されと蹊附先後奔走
禦侮と云てうの四種の臣がされへねりづれば以
て周家八百年の業が無一るいと蹊附と

ソウトが卒て上がそとを崩しもがりよと
あうてそと民のサよちて下のよよせと
つきもきうやうよ下のうととくとくと先ほ
ととくおなすてあはすととくとくあうてそと
前から後よとくとくあややちのまくやう
日本がじき強がれてもととくとくとくとくと
きりとく奔走とくとく徳が喻一參が迷とくとく
世よ處きよとくとくとくとくとくとくとくとく
徳行他のとくとくとくとくとくとくとくとくと
よ吹徳するとくとくとくとくとくとくとくとく

もて武畧抜りく勇力が奮ひ一陣ます
すと、いきなり強敵がも追拂て雅彦の家の
雅彦と他所逃れずとも恐懼アリテの勇名が
とるこそ文王の至徳が稱まりてこの四種の
臣が海へもさうぞなせよ義をとよ靖也
大雅ともからうてつゝ是とも人臣の志よ
仕うるが毎へもさうぞとくとく人臣の志よ
ノをも忠義よすと教えらるやのとくよま
「もあらわすとおもづくすが時からむだる
時よりのとくとくちあわくとくとくまう情

絶えぬるもと毛呂山の忠義とくとくもの
政とぬすとくとくもつとくとく覺ゆとも一々
一己をうちの所傷よ止すもまの匂がねゆとも
十人石人とかれとくとくお稲が保ちにまと
安へゆ功名すとくとくもとくとくあくはされ
右の所持の臣をあくとく行けれど人々の性
のちもきと修飾てまくとはくとくとく
の種の名目悪く不得手とくとく戸泣素餐の
そもうがまゆるへうれはもくとくを次第
ううへ

○下伏事て上伏承すりとひへすてあひ成
るのゆよちて政事はあひうる士ちまほせん
けらぬとやつこすへ一も一おへゆるやよち
士大まへ行ふ下のむとくへひて上と承る
きる事うかとぞ一ひを充東人あひよ
下のゆきもけよそひつまつ(モシタマの前
約半分)キモトトヘヌキシハヤヒテナシ
先手一人のとよ詮有田の下へヌキシハヤヒ
シの傳とほらわひすへたとそりうりうるを
大事よなう忠臣とても海にまよへるを

○此ニ徳次偽うなへてアヘヌキシハヤヒ
アユヒ信彼一キモトモヤシヨリ微うるう
顯うるべれく厚毛たるうり見うるうりと
中庸もとゑ通う陰陽の場所よりはち
致くられ顯見の巻きく得てたと
○相導て前はすくとすくとすくとすくと
志下の志下の志下の志下の志下の志下
志下の志下の志下の志下の志下の志下
へ立ちすがひと偽とゆふとゆふとゆふと
忠臣の良縁と盡て君が賢明よ縁ひぢたる

ち元來よりの性質よりき徳のありて、かく徳の
臣よすみやくすすりゆめもとくすひり
れ徳なまきゆうす

○徳な喻一巻と述べりと大事ある
○徳へよおよの徳と在向へ吹徳いへたき
ひづ吹徳す徳のねがまへまとも
にざくへたも黙もつとうかうへた下
もの美目ともうけの梓ともかくらゆ
うく自己の前代不つてくまくとせ

但一邦志の師弟のうへ入ふ吹徳す徳の
徳へ世よまれるもゆけんをとりとくとて
男の藝へ武のよしに徳きく能ひ
もく地とも變へとゆゑの徳徳のうへり
爵位のうへりやまき安逸の樂
おひきと山川の景物も身あらわす
世態の苦辛も嘗たまし身あらわす
おひきと詩文書けり歌連平よもゆ
とぞ徳の人の険阻艱難と經験一眞実の
感慨より出たまへりと考する所

子臣へあくまでものをよ推せりひ袖もさう
ぬとぞらる劍持の御とそん大坂坐の爲め
育つ氣力のうれりもあくまで可え
うすとぞまほ健うる卑賤の人の目線は
わざとくねむすとあきのれをと見えにひづ
吹徳もおぬとあきのれをと見えにひづ
氣附つきを流よ立ちうきとあくみ無常あ敷がよ
だらまよと見えにひづ
よきくらとよしよひくます胡乱もあひ
て飲食よや不きよますこのけめやせうの間

又まひきつゝゆる宴あれどもよそあらうとゆと
りあくわさりつゝよへ起あらうとゆとつゝも是丈
やくよへる年は日を多くあります給年女年な
皆勤一アレ「菜が甘」一「まつまよ安」一家
一類しのゆ一出入りを改めるひも
多かられぞひづく人多めの美徳も少ぬ徳もあ
くま一かまくようう(これくほひづく人多めの美
徳とて廣く徳とす)モヒツク一惟ひづく
悉の徳と生れつまくまくの世界(被毛)
お来る年(モヤ)待て称譽す(モヒツク)も徳と

行たりや爵位のまゝも篠川の所
公私の方ともあつてすまへるまの又母と
おうすみゆきよをすら篠川の邊の祖先よ
支嗣へ孝子よやくへりて所と云ふのまも
ワすきゆすゑのうりゆくよつやくよ
フ翁よ下さりとせん葉うひて自己を
ままたとけり士氣のまうひとゆくすり直
筆かのほがれりもあはのまがも川奈弱
儀姫の臣とをさけ面寢のまとぬきを先祖
の功業と失くぬやすよ子孫の興衰をもつて

毛と教一幼と憐く孝悌の人と譽し縹寡孤獨
の夫とあくび群有司の實名が審りて小過
がゆる一成功とはやす一對内外俗の美惡
と一身の若セ活よぢゆて能事よたゆゑ意
するから死とモ徳とモアリ組一君徳と
古生聖王の造制よ隨ひゆより増長すると
うきよ學問とねくすと寂神寺の美德
とすと古今磨然たるよと古脉の傳承り
ゆくあみ一天祐とゆくひとくよのそる
もとまれぬよいもありとつまむせられ家

國が保ちゆゑあへいりては、豈も人と
之をもうの徳とめひ放すことをもあへ候之
の徳はとあらゆゑあり、徳世界ひうく称
揚するもふ人多くわざくよかくしきうく
教ひきとひきうてはせよともかくとはて
平林万葉歌ひ廻すうともなる事あると
やくして此などをひゆく「あれ」と
およ諸侯考人の「よ美因」とすることを
まことあらへ考人の「りと候極す」を
うるるものあへ」といふとおう

教學

(三十一)

玉不磨を成器人無事不知道をよいナヘテ
至主質をあうかす學を又が遠て人が教る所
とす天子の學宮と辟雍とひの脩侯の學宮
或泮宮とひの行き小德行道藝と教る所也
この替古所とも古帝王の所が修めんと治め
て下主家と安室あるひ一々と學めひもすて
毛子の友職とひけてまめにとくちやうと
をあへずきはくそそきもする役へとくちやうと
おう凡人の生徒を教へようりとくちやうと
おう凡人の生徒を教へようりとくちやうと

娘あひもくされ思ふ通融すとあくとく
自己の心とねむ室規すと人と反扱ふゆゑ
たゞくもあくふねくと角らるゝものと作り
ゆくあそくおくと園らわと作りやくその
人の目をうながすとひて作り出すとくわよ
きくわどりくわと出来上う次キよくと元扱つ
下のうとゆび方よく善惡邪とつをすすら
つきんずれると紙ヤ出る時ふうり役人もゆと
りくわおもくもゆくいあくづけキよ思葉と

(二十一)

やくへりそあよひよと同念せ波合をたれま
同目功者とて當兵ぢうのすももじゆをを
ちるするかよ年中うけいふき若翁とすると
さくさくもろきとて法度へすとね段へ大工
下底へ材木のめへすとねあをした大工
大工あまた材木あくへいとて造作とすと
すとくねよす大工下底もとて材木あくへく
ひとひて細工の手際とくすとくされとすと
ち工材木三川あるくすとくすとくのなりの
考えたり下民のいやあをきておきつゝの口とく

すとくと古の重主慶元と下山家が活やまし
撻りくらひもきすとくねこくのすとくねと解をひ
差るへ上と大工とあるもくと周れば師氏保氏
うとの職の人よと傳とひた藝六侯名とある
法のとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
すりは下品の職うちのくへい勅方とくとくと
大要へくよ傳めん藝が發へとけよとね段目と
民から材木とあをよとくにる法と古の重主
慶元とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
くとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

て実、多きをうながすと武とあらじとしもと金銀
糸綾とあらむあくべて一時の饥饉と殺ひゆ
れきはあす民の罪よ歎へもの多くとまひ
ゆひて是よき教誥マハにて自然より刑罰
よからぬあらすとどうりひかふと下アシキも
上の教誥マハに死スル刑スル罪もる。咎もあく生瀧
城もあくすと教誥マハ化スルを居スルと爲スル
ゆく事より仁政マハの恩スルあく人スルのあらじと
政治の氣スルおよ布スルあくみ落スルもあスルの節
たスすスほ山大洋スルくスルこそ竹本元系

あらまゆく事スルてあらうる良材義方
もそたちてよすたとのすうねよぞくすくわ
かんふのをもする易スル造作スル綱スル舞
下アシ民の根本スルつる政マハ教誥マハの友スル能スルて
曉スル家スルの法スルを度スルめもくスルよううスル事スル
義方スルそれもよれまわひの毛スルより生スルて人スル
憂スルるをとひて下アシが取扱スル曉スル喻スルの友スル四方スル
居スルてき縁スルをゆくも下アシ頃後スルの民スルて
上アシとれすゆくをじて君子學道スル人スルふく
事スル易スルとれ子スルとくスル教スルの事スル

物の事は皆無事に済んで居た
が、此處は天災の爲めに甚だ困窮する事
が多かった。春の旱魃と夏の水害と秋の霜害と
冬の雪害と、此處は常に此の四害に罹る事
で、其の爲めに甚だ困窮する事は常である。

政の大體

政とすり小大競よりそれよりのにれか東よ
北止て廣大の海へ及不すよりよ多不先
天長とからきよを徳春暖夏旱秋涼冬
の氣たゞらず山川深溪の宣とたゞさるまて
やくんもるよされ春の暖とゆて種を
植うるゝの風とゆて播とゆ一秋の涼とゆて
實のつきのきとゆて収穫畠か麻麦を
うゑ水と霜と極ておれりや死とひそ
れ食のきと核(牛)それとゆふよ

卷之二

食を「生」と云ふやうよし本と内の事も此
の宣と達へすらぬまくて此の傳されたり
ゆゑに傳へし事はもしくて生も通うるも
生も死も生氣より死氣より生氣と生も死
がりも今日より自らの傳へしてくるが故
名の如きより死と稱されたりともうと
生と云うやうなれども死のたる
事は廣大なる所として生氣と死氣のたる
不系本持氣として性命と有り生と死
も生と云ふやうあるともいへば精と云ふ

生をもつまへん安へる事あらざりとおもふやうもなし
きまう人間の思はずも四百歩ばかりとよりあらま
あへどりづく限有りてすゞも一里よろたれとも
才里よくとくす十里よく渡きた五千里よろ
あまねくねまよてひきとせきのあらぬ
みをうよとせきとせきとせきとせきとせきとせき
てやまとよしむかれ子を君子惠而不費と作

○鳥居在於傳又トヤマニ止マトムトアシタメモ
往の行ルアミモウタタカニトモテ施ト

めふきめぬくも熟すゆゑゆゑの下よ面
つまらぬ事へんか處よにを抱てすやうへ先まわ
はぐとあむよ仕ひりゆふてまわはぐと
西直よ仕ゆる食欲の心がわくやうよまわ
食欲の心がわくやうとく座ゆともとよ
はくと座ゆともとよとやうとやうとよ
もととよとよとよとよとよとよとよと
ゆくとよとよとよとよとよとよとよと
とよとよとよとよとよとよとよとよと
とよとよとよとよとよとよとよとよと
とよとよとよとよとよとよとよとよと

ハシムハ志物也経れ義理のくと嘗て仕ひとよ
はま下組トミ人ト嘗て美はりトヤ時々の處
もすてまぐの所からうつて二事もと尋ねを越セセ
アリモ元人の耳目と爲シテ往々主事とみ
まとも人の善惡とすらよ用ひてヤトヨツタ
久保吉成や佐久人モ少モナシ敷用有る
スカクうり毛くもアヨウシテモモ角ひつ
毛上のみとくても人の善惡よもよをあらむ
アリモ良木ト且又善ト嘗テヤリカセテあらとゆ
トモアリモ本業もさるアリキ事よ不思議考

されまゝの人の處罰と云ふ懲退とは事す
事す大抵せよにあくまで仁政の爲手
事すがゆゑにあくまでもああめ復せたゞる
やうと極便と先とより善と揚る
めうるゝと惡と云ふと嚴うす風と後
候と易うしやうて云うやうへん人の善
と揚てまへのあふと化すと云ふ事は
あるゆうと云ふ様子れども一人物及後
事すがゆゑに十善とあす十惡と云う事
に考へわざ候とあらゆうと云ふ事す

ノセト威は畏を拂は懷くとくの念は下よせ
ゆきの柄として要とりゆうを懷くとくセ
ナと政令の行きナト根本として仁義勇
の三と云達摩と組合をすヒキと考
てナシヌと云々進退がぬきと云ふ事罰と嚴
はゆく衆吏清廉と云う事湯の風改り事
自然と下のあたう西道はお成の村民間
はそれゆうやくもと云ふの考へ
とくまじい事と申すがゆえに核はお成食の
事と申すがゆえに申すがゆえに申すがゆえに

お持み今日とも一困約窮元よりおひいきも
自然とすましくはなれど民方裏微よりより
少すく五人より多くもしくは減へるかより
我上とつ家の種也と筆トアノドリ不役
そく名を五合一升のものとて大体よりお取り
貪民と云敷は仕事ももの有様より是の時
大田の爲よ彼有遺秉此有滞穂伊寡婦之利より
とやう百姓ゆきうる時へ刈取れいきの手をも
一把二把の取れ刈取れいきもせずアラホ
あされと捨へりてを爲めり今月の渡る

とやうとよすとよすより一升一合とせらむ
ゆくくる姓たもも並極と捨ひやうのまくと
盜人よもともちうひやうおめりとんを弱
窮屈の民へ飢て死ひたりかぬくとせらむ
それも大体とくあくとそのゆと考へて下れ
下とも相互お持ようりて飢渴えず重ねが
ヒヤ因もとくらかうお彼家を仕りて誰う情
ふきはぶ勝へた後すもあらはすあこせ
セヤ通を経るよほももあらうるひえま

是の如きよりは人へうつすもかづらひと
一身の取引しりやをより生じさせとよ
くよきる衣食のねつる種よりも凶惡の民が
多く食欲より多く人の上を相成るやうに惠み
ゆふものより多くかよつましくかづらひとく
政のかきり起きたゆれ儀として益々も
うの因縁とうりゆうをへうるよ爲めか
あらゆるよしと大體として度外スル

○人の善と業一惡と罰一善と業と業
の代りへゆかうと業は然れど可業者へ辯く

可業悪へたる者アリと何故そしやぢへ業へ
モヘアへの仕合よ止き罰へ他人すら業のまゝ
あよびせぬたゞてヤさん町村よつ人々の孝子
育むる時の者の孝ひとよ上りて清廉正と
頗アリとなむ内へ法度組ひのものへくくす
き経とは是よとくの筆紙墨と費一其役
支配一出立とよとく上りて殊有まゝを
きくうえすよとく數遍多出候くよ
吟味すと云はん弟又はよ相成り内へあへ
是あと多めづらすとくの餘人の仕合へる者

相處する所は左海の極の孝ちと見えてりて是
人情自然と感彼仕事のあらむ物へ造作も厭ひ
不すとより左組一左群の善人（ハモシモテ）
キヤウリモト指て上よりの化（ハセ）ともうけキヤ
ウの大概のことをして不孝不忠不情のもの
を多く有（ハサウ）トして不孝不忠不情のものと
町村（マチムラ）にて居る瓦（カモリ）瓦（カモリ）の者と
は出（ハスル）小向の店舗組合の者また大それる替代
義（ヨシ）つゝと瓦（カモリ）物へ造作（ハセ）する方迷惑まゝに役職
を恐れヤリモ一日もアケヤ出（ハスル）とよ出産

且又その悪人出法度（ハセヒツ）とぞ一ヤル者ナシト（ハシタ）
ヨリアリ出立とて序巻（シヨクマツ）をあひ（ハシタ）とよみ
信（ハシタ）と惡人（ハシタ）年々多きものを善人（ハモシモテ）とよみ
ものとせん在紙（ハシタ）の所（ハシタ）信（ハシタ）とお城（ハシタ）とよみ
善人（ハモシモテ）出立とてその支配（ハシタ）たる者とよみに署
を立（ハシタ）とよみり善人も年々経（ハシタ）まく
然財（ハシタ）の善人（ハモシモテ）と多くそのとよみり
可（ハシタ）とよみり左海の善人（ハモシモテ）セヤウシ年
不の序巻（シヨクマツ）成多氣（ハシタ）下（ハシタ）の財用（ハシタ）と多く
よ勢（ハシタ）とよみりとなふ人（ハシタ）も有（ハサウ）ト（ハシタ）とよみり善人（ハモシモテ）

業とあくまでもサシの儀とも業とまゝ
もあらる姓のひなづく耕作と七軒社町へ
いふへと賣と出精仕立とては自然と上の
凹物へと仕出へと換とキサヤヤうする不直
仕牛へとすりト思へとア因へ何をもあつてゆうり
やくく役者と吟詩よかととあてつゝも
根氣がまへと筆紙墨と費へとすり多き
相意の仕事へ作れどと左上の換が多き
せうすじふ向隣の絵をとがつともく
もアヘキモキリヨがくちうりハ老も多々アヘ

二八とア肉は事中よりへひとも民をう
あもひやことよて割右の費ひあひを雇ひ附り
多きがむうの所通例の役人へと月をア思
へやと出るみをひき活とする苦惱へとする苦
とれもあら活りと清すとこよとよとよとよと
朱津の小山とア所は市三郎とア石姓あれの
きのうよア付されはモおまくの田地三石目永代作
持もと孝子(作)ぬよ下る田へ少ふ三万石の
田もへと次第よ減へてやうとアもの有る

家を行ふ事あつて一通すむにあらず併年
孝子へ作を取より材りて捨年廿年、と小
三万石の内あるべ減ヤ万石あは何年是と本
よりおもひ改めよひりて田地と作り取より下
手うる孝子の五年を百を出でり家主の差支
へげよもくとがぬうよ廢れりてももう一人も感
する程の多めひへぬきあとのよト且又十年
廿年より少く行へ上の費がよくきてアレたと
ひひき入へ減ヤリても亦三郎うゑの清ふの年
までト市三郎と見ゆる一郷一村よりる姓たる

毎日一歛充余耕よりて小手中もその日
武三万歛の傍一マヤト左トリ五石十石の年
よ作り傍一マヤト左トリ五石十石の年
サウリてトセウテ百石目をね左トリ作り歛を
目立ヤルモヘ人をうし爲みてマヤ事ふり
ヤ便トト大戸の在無大體よびとひを
ふきゆ

農官の心得

むう一至王竟舜天下以治すよ五穀樹藝の
安樂成后稷と名づきて、主司穀掌もう國語
より號の文公とひ、賢君天子宣王が説て民之
大事在農といへ治民の政はキノ農業よある
ことなり。もう一著すよ凡有地牧民者務在四時
とぞへぬ有地牧民とく國君公主のことを
務在四時とく夏秋をよ見て農業をよさる
事うよ民とを結するこそ孟子より緒候の寔
三古地人民之事とありち地の地方をよし人民

とく士農工商の四民をり改事とくをのせ民と
元扱ふ仕方とく去地廣されども人民すくもざれく
國貧弱るう人民衆をきを取扱官とくされ
て四民安堵すとく。さて而民のやうとく
農民とよの根柢とすとく。今の世人ともまじ
代友と成て百姓とえ扱ふ身うち五そ大切うる
穀掌とつとく。究初考一よしなまきことよく
天子のよたとく下へ匹夫匹婦の昇たふもと
人の性命とよる本いえ食のよづよとくまろ
え食の源い百姓の勤よりしれると眼あつと

あるふまめ代友のいとつる樟風代はん
みて下よりあさりの出来れ財見と吟味して
仕置がかかる役とくらくな／百姓などへす
そひても年貢ま進と取ると今日のままで
やくらなたうけまつたとえうて絶一だ
下くらむとおりを理とまれひゑてまほうと
の義となれがちりてお下立ちなどひける
拘まつたくらうたおのきく／＼身の今
日が安樂よく／＼て一生がく／＼つうく
るより外よかへうれしきとぞるゆゑよと

立てられ代司るまひ代友とよそのなれく
人／＼身務まよれみゆきにいたゆ／＼財
上の鳥ともく／＼す人のよどもう袖うます
く／＼おこらよりあそび／＼己う身ひりの
が／＼たぬたり／＼す終／＼あぢを産と仕出をて
主犯刑戮／＼おしり／＼とあま／＼代友乞と
き結局きま／＼方／＼あももよ／＼お互よ立
ゆ／＼す／＼或／＼あ／＼或／＼ま／＼命うキ
指考とが／＼て百姓のまとゆうり／＼うす／＼農
業が／＼や屬／＼て衣食の源と丈ま／＼性命

の根とかくするとも組一人情り智あるを
思ふと仁愛より心抜きぬきのまれを先
方へよ仁らともうて下がつてもを先
ともじるゝよ死役人と循吏良吏といふあき
役人と酷吏賊吏とひ循良の吏に直ふ歎も
法度とひす不義非の指掌がた歎意悲
柔和よ下と取扱ひ上のまよつて下がく
れりうす下よほやまきこして上とあひじうす
家主よす系の利害と案考つて役目が勅
るべといふ酷賊の役人の食欲偏歎しても法度と

まも威勢とひてむづき下がと加へ眼あ
のまおとまくと家主よす系の利害と
えす立身出世とんぎるものとりふこあつま
循良の役人多きもも上の徳洋美威よもぐれ
わづかてへら税抜するかよて地津めも福慶と
津ちて家國富強安寧すとこ譽のをうす
すうや一酷賊の役人多きももあはるよて地
津よ津すらもあたしるかよて地
津めも殃と津一あふ裏弊危也すとれな
形よぞくうや一うの二ふとよく無へもうて

職よりよきひがみす人お忠良の臣と称して
家國の玉靈とすことをま

てかくは御心の事なり。御心の事なり。御心の事なり。
御心の事なり。御心の事なり。御心の事なり。御心の事なり。
御心の事なり。御心の事なり。御心の事なり。御心の事なり。
御心の事なり。御心の事なり。御心の事なり。御心の事なり。
御心の事なり。御心の事なり。御心の事なり。御心の事なり。

嚙鳴館遺草卷第二

